

大学体育における障害者スポーツ体験が大学生の障害者スポーツに対する意識に及ぼす影響について

福岡女学院大学人間科学部 角 南 良 幸

福岡大学大学院スポーツ健康科学研究科 鍵 村 昌 範

九州共立大学スポーツ学部 下 園 博 信

The Effects of Para-Sports Experience in Physical Education on the Consciousness of University Students to Para-Sports.

Yoshiyuki SUNAMI¹⁾, Masanori KAGIMURA²⁾ and Hironobu SHIMOZONOK³⁾

1) *Fukuoka Jo Gakuin University, Faculty of Human Relations, Fukuoka, JAPAN*

2) *Fukuoka University, Graduate Schools of Health and Sports Science, Fukuoka, JAPAN*

3) *Kyushu Kyoritsu University, Faculty of Sports Science, Fukuoka, JAPAN*

キーワード：障害者スポーツ，大学体育，意識，計量テキスト分析

Key Words: Para-Sport, University Physical Education, Consciousness, Quantitative Text Analysis

1. はじめに

近年，学校教育現場では世界規模で障害^{注)}のある子どもと障害のない子どもと一緒に教育を受ける「インクルーシブ教育」が広まってきている。インクルーシブ教育とは，障害のある子どもや，学習・生活上困難のある子どもを含めたすべての子どもが相互に良い効果が期待できる教育である¹⁵⁾。このインクルーシブ教育の理念で行われるインクルーシブ体育では，学習内容に役割分担や協力し合う場面が多いことや，できなかったことができるようになる場面が多いことなどから，他の教科よりもより大きな教育効果を生む可能性が示されている^{2, 13)}。大学を中心とした高等教育機関の障害者在籍数が増加しており^{3, 4)}，大学体育においてもインクルーシブ体育実施の可能性も含め^{19, 20)}，よりいっそう障害がある学生への対応はもちろんのこと，障害がない学生に対しても障害者や障害者が実施するスポーツへの意識向上を図る必要がある。

高等教育機関，特に大学における体育・スポーツ活動については（公社）全国大学体育連合が中心となって，授業改善や課外活動における学生スポーツ発展へ

の協議を続けてきている。しかし，障害がある人がするスポーツ（障害者スポーツ）や，障害者や高齢者を含めた全ての人と一緒に楽しめるように工夫されたスポーツ（アダプテッド・スポーツ）を取り上げた研修会や学術論文は少ない^{11, 12)}。2020年には東京オリンピック・パラリンピック開催が決定し，健常者のスポーツのみならず，障害者スポーツへの関心もさらに高まっていくことが予測される。そのような中，前述のインクルーシブ体育への期待，大学における障害者在籍数の増加，さらにはアダプテッド・スポーツ普及の需要などから，大学体育でも積極的に障害者スポーツやアダプテッド・スポーツの体験の場を提供し，障害者や障害者スポーツに対する意識の変化を確認していく必要がある。しかし，専門科目としての障害者スポーツ関連授業が，大学生の意識変化に及ぼす影響についてはいくつか報告^{1, 5, 26, 28)}があるが，一般的な大学体育における障害者スポーツ体験の効果に関する報告は少ない²¹⁾。また，これらの報告では質問紙を用いた量的分析は多くなされているものの，自由記述の感想について質的アプローチとして客観的かつ統計的に

分析した学術論文はない。近年、自由記述に対する解析方法として計量テキスト分析が注目されており⁶⁾、大学体育においてもその活用可能性を探ることは重要である。

そこで本研究では、様々なスポーツ種目を体験することを目的とした大学一般体育において数回の障害者スポーツ体験を実施し、障害者および障害者スポーツに対する意識の変化について、自由記述による感想のテキスト分析を含めて検討することを目的とした。

2. 方法

1) 対象

福岡県内のF女子大学幼児教育系学科1年生で、大学一般体育実技科目を履修し、3種目の障害者スポーツ体験を受講し、かつ、その前後に質問紙調査ができた93名(3クラス)である。全ての対象者に本研究の調査目的および結果の取扱いについて、授業の成績とは無関係なことも含めて説明し承諾を得た。

2) 介入内容

様々なスポーツ種目の体験を中心とした大学一般体育実技において、後期後半3回の授業にて障害者スポーツ体験を実施した。数ある障害者スポーツ種目の中から、障害のない学生が具体的に障害者体験でき、かつ、一般的な大学体育でも用具の準備や実施スペースの確保などにおいて実施しやすい種目を検討した。すなわち、身体障害のうち肢体不自由と視覚障害に着目し、肢体不自由体験においてはシッティングバレーボールを、視覚障害体験においてはサウンドテーブルテニス、ゴールボールを実施した。全てのクラスにおいて同一の担当者が同様の授業を実施した。

a. シッティングバレーボール

シッティングバレーボールの規定コートサイズはネットに正対し横6m縦5mであるが、本研究では近似サイズであるバドミントンコートのダブルス用のライン(横6.1m, 縦6.7m)を使用した。ネット高は規定どおり女子用1.05mを採用し、バドミントン用のネットを支柱に縛り付けた。ボールはレクリエーションバレーボールKV180(ミカサ製)を使用し、その他のルールは基本的に正規のルールに従って実施した。

b. サウンドテーブルテニス

サウンドテーブルテニスは通常の卓球台のエンドラインとサイドライン(エンドフレームから60cmまで)に、ボールが直接飛び出さないように規定に準じて台上1.5cm高の木製のフレームを自作して装着し、ネット

は台上より約4cm離れるように通常のネット支柱に結束バンドを利用して取り付け付けた。ラケットは通常使用しているペンホルダーの裏面板側を利用して行った。ボールは規定球である鉄球入りピンポン球(サウンドボールNTA-NB1121(ニッタク製))を、アイマスクは視覚障害者スポーツ専用アイマスク(チャンピオン製)を使用した。

c. ゴールボール

コートは規定サイズであるバレーボールコートを使用した。規定の競技用ボールは硬質かつ重量があるので(直径240mm, 重量1.25kg)、通常は眼球保護用のアイシェードおよび必要に応じてプロテクターを使用するようになっている。しかし、今回は簡易にかつ安全を考慮して実施するために、ボールは鈴入りバレーボール4号球(直径200mm, 重量240g; ソフトタッチ鈴入りボールV4SLBL(モルテン製))を、アイマスクは前述と同様の一般的な視覚障害者スポーツ専用アイマスクを使用し、競技時には少し弱めに投球するように指導した。また、ゴールは正規のゴールが準備できないため、ゴールライン側コーナーに三角コーンを設置し、その間を通過した場合に得点とした。また、ゴール前のチームエリアを囲う形で細いロープを床に貼付し(6m×3m)、アイマスク装着時でも床への触診でコート上の位置が把握できるようにした。

3) 調査内容

永浜ら¹⁶⁾の質問紙を参考に探索的因子分析によって求められた障害(者)および障害者スポーツに関する意識についての質問紙²⁴⁾を用いて実施した。この質問紙は、障害(者)に関する知識・印象11項目、障害者スポーツに関する知識・印象17項目から構成されており、各項目「強くそう思う(4点)」から「全くそう思わない(1点)」の4段階評価法で行った。分析は先行研究²⁴⁾に従い、障害(者)に関する意識尺度2因子(障害(者)へのネガティブイメージ(障害に対して暗いイメージがある, など6項目)、障害による日常生活困難感(障害のある人の自立は難しい, など5項目)、また、障害者スポーツに関する意識尺度4因子(障害者スポーツへの興味・関心(私は障害者スポーツに積極的に参加したい, など7項目)、障害者スポーツ実施に対する効果認識(障害者がスポーツを行うことは精神面の変化において意義がある, など4項目)、障害者スポーツ実施に対する心配(障害者がスポーツをすることは危険だ, など3項目)、障害者スポーツ実施に対する支援の必要性(障害者がスポーツを行うには特別のルールが必要だ, など3項

目)) についてのみ行った。得点の解釈としては、障害(者)へのネガティブイメージ、障害による日常生活困難感、障害者スポーツ実施に対する心配、障害者スポーツ実施に対する支援の必要性は得点が低いほど、また、障害者スポーツへの興味・関心、障害者スポーツ実施に対する効果認識は得点が高いほど良好と考えられる。加えて、障害者スポーツ体験後にそれぞれの種目の感想を自由記述で調査した。

4) 統計処理

障害(者)および障害者スポーツに関する意識尺度は、SPSS12.0J (SPSS Inc., USA) を用いて障害者スポーツ体験の前後比較について対応のある t-test を実施した。値は平均 ± 標準偏差で表記し、有意水準を 5% 未満とするとともに効果量 (Cohen's *d*) も示した。各障害者スポーツにおける自由記述による感想のテキスト分析は、計量テキスト分析ソフト (KH Coder ver.2 beta31)⁷⁾ を用いて行った。さらに、得られたテキストデータから最も多く出現していた単語を抽出し、出現パターンの類似した単語の共起の程度を視覚化する共起ネットワークを描くとともに、描画されている語 (node) 数、共起関係の線 (edge) 数、ネットワークに含まれる関係の密度 (density) を求めた。分析に使用する語の取捨選択において、各種目名を熟語として強制抽出するとともに、具体的な感想をより明確にするために、「思う」という感想文頻出語を分析に使用しない語に指定した。本研究では、計量テキスト分析に関する先行研究⁶⁾を参考にするとともに、自由記述で得られた文数・単語数を勘案しながら各要素間の関連性 (クラスター) が明確になるように試行を繰り返し、単語の最小出現数は10以上、最小共起関係 (描画する共起関係の絞り込み) は30とした。また、共起ネットワーク図は特徴的な表現の抽出を容易にするために、クラスターがより明確に確認できるサブグラフ検出 (媒介) を採用した。共起ネットワーク図における円の大きさは単語の出現数を表し、強くお互いに結びついている部分 (サブグラフ) は実線で繋がっている。

3. 結果

1) 障害(者)および障害者スポーツにおける意識の変化

大学体育における3回の障害者スポーツ体験で、障害(者)に関する意識の変化において、「障害(者)へのネガティブイメージ」では体験前15.2±2.59点から体験後13.3±2.72点へ ($p<0.05$, $d=-0.73$), 「障害に

よる日常生活困難感」では体験前12.2±1.68点から11.1±1.98点へ ($p<0.05$, $d=-0.65$) と有意に低下をしていた (図1)。障害者スポーツに関する意識の変化において、「障害者スポーツへの興味・関心」では体験前19.6±3.13点から21.1±2.98点へ ($p<0.05$, $d=0.48$), 「障害者スポーツに対する効果認識」では体験前12.3±1.48点から12.9±1.67点へ ($p<0.05$, $d=0.40$) と有意な増加が、「障害者スポーツ実施に対する心配」では体験前6.8±1.16点から5.9±1.32点へ ($p<0.05$, $d=-0.75$) と有意な低下が認められた。しかし、「障害者スポーツ実施に対する支援の必要性」では体験前9.0±1.08点、体験後8.8±1.31点で有意な変化は認められなかった (図2)。

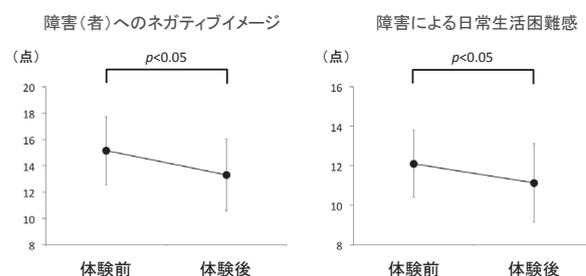


図1. 障害(者)に関する意識の変化

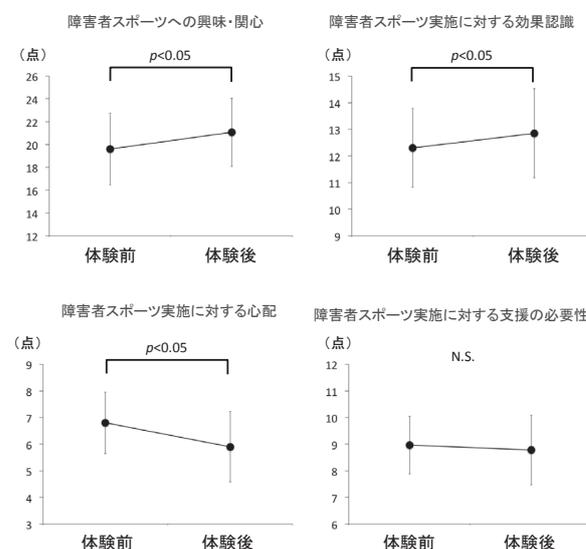


図2. 障害者スポーツに関する意識の変化

2) 計量テキスト分析の概要および抽出単語の比較

各種目の自由感想文の文字数は、76.7±30.82字 (20~173字) であった。また、シッティングバレーボールにおける総抽出語は5057語、異なり語数 (何種類の語数が含まれていたか) は545語、その内、助詞や助動詞などを除いた分析対象語は419語、ゴールボールにおける総抽出語は5253語、異なり語数は578語、分析対象語は431語、サウンドテーブルテニスにおける

総摘出語は4696語、異なり語数は517語、分析対象語は373語であった。

障害者スポーツ体験による感想を特徴づける摘出語（上位20語）を表1に示した。各種目に共通する単語は、「ボール」、「難しい」、「スポーツ」、「楽しい」、「感じる」であった。どの種目もボールを使うスポーツであったが、難しいながらも楽しさを感じたようであった。サウンドテーブルテニスとゴールボールに共通する単語では、「音」、「目」、「分かる」、「聞く」が摘出されており、視覚障害者における目が見えない状態を実感しており、ボールが奏でる音を良く聞いて競技する実体験ができているようだった。

表1. 障害者スポーツ体験による感想を特徴づける摘出語（上位20語）

シッティングバレーボール		サウンドテーブルテニス		ゴールボール	
摘出語	出現数	摘出語	出現数	摘出語	出現数
ボール	62	難しい	79	ボール	101
難しい	60	ボール	69	難しい	54
バレーボール	49	音	66	音	40
足	41	目	28	スポーツ	31
座る	38	見える	26	分かる	29
動く	38	耳	26	人	27
使う	33	分かる	25	見える	25
スポーツ	28	スポーツ	24	投げる	24
楽しい	27	集中	18	目	24
移動	21	サウンドテーブルテニス	16	体	20
大変	21	打つ	16	感じる	17
普通	20	聞く	15	使う	17
立つ	20	楽しい	14	自分	17
人	16	ラケット	12	声	17
体	16	位置	12	止める	16
手	14	出来る	12	楽しい	15
障害	14	障害	12	ゴール	14
一緒	13	判断	12	ゴールボール	14
感じる	13	感じる	11	見る	14
使える	12	競技	11	聞く	14

3) 共起ネットワーク分析による各種障害者スポーツの感想

a. シッティングバレーボール（図3）

シッティングバレーボールでは6つのサブグラフが検出された（node 21, edge 40, density 0.190）。種目を表す特徴的なサブグラフは、「難しい」を中心に「座る」、「動く」、「ボール」、「打つ」などであり、座ったままで移動してボールコントロールするのが困難であることを実感していた。また、「健常」、「障害」、「一緒」が繋がっており、健常者と障害者が一緒にできる種目であることを感じていた。さらに「楽しい」「スポーツ」だということ、また、「普通」の「バレーボール」、や「手」と「体」を「使って」「移動」するという認識も摘出されていた。

b. サウンドテーブルテニス（図4）

サウンドテーブルテニスでも6つのサブグラフが検出された（node 22, edge 42, density 0.182）。ここでもシッティングバレーボールと同様に「難しい」を中心に「ボール」、「耳」、「集中」、「打つ」が繋がっており、

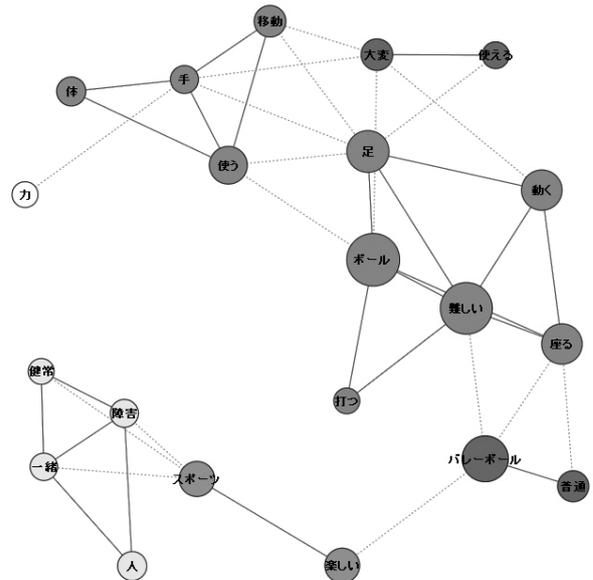


図3. シッティングバレーボールの感想における共起ネットワーク

アイマスクを装着した状態で、耳を集中させてボールを打つことの難しさを、さらには「音」を「聞く」ことで「分かる」、「見える」ことも感じているようだった。また、シッティングバレーボールと同様に「健常」者と「障害」者が繋がる「スポーツ」であると感じていた。また、「見る」種目としても「楽しい」と感じていたようである。

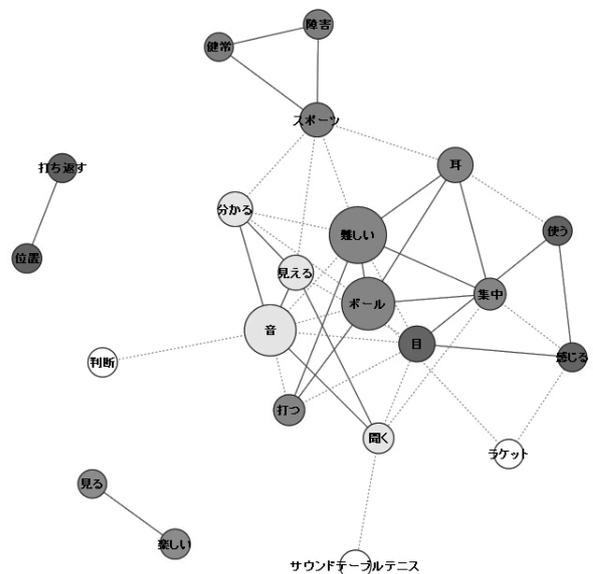


図4. サウンドテーブルテニスの感想における共起ネットワーク

c. ゴールボール（図5）

ゴールボールのサブグラフは5つであった（node 27, edge 42, density 0.120）。他の2種目と異なり「ボール」の印象が最も大きかった種目であった。特徴とし

では、「音」を聞き分ける（「聞く」、「聞こえる」）のは「難しい」と感じており、「周り」の「人」の「声」で「自分」の「方向」が「分かる」が、「目」が見えない（「見える」の否定形）状態で「ボール」を「投げる」、「止める」のは「怖い」と感じているようだった。また、「体」「全体」を「使う」種目であることを強く感じ取っていた。しかし、シッティングバレーボールやサウンドテーブルテニスに認められた「楽しい」という単語は共起ネットワークでは抽出されず、本研究で実施した他の種目と比較して楽しさを強く実感するまでには到らなかった。

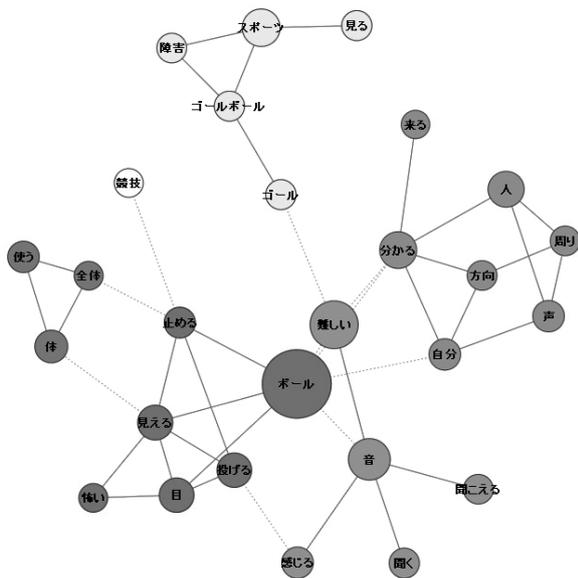


図5. ゴールボールの感想における共起ネットワーク

4. 考察

本研究では、大学一般体育実技において週3回の障害者スポーツ体験を実施した結果、障害（者）へのネガティブイメージや生活困難感、さらには障害者スポーツへの興味・関心や実施に対する心配、効果意識で良好な変化が確認された。また、障害者スポーツ体験後の自由記述によるテキスト分析から、それぞれの実施種目に対する客観的な感想が抽出できた。

大学体育において障害者スポーツ体験の効果を検討した報告は、体育・スポーツ系学科や福祉系学科に設置される専門科目としての「障害者スポーツ演習」や「障害者スポーツ実習」を対象としたものが多い^{5, 26, 28)}。吉岡ら²⁸⁾は、体育学部生涯スポーツ学科の学生を対象に、「障害者スポーツ演習」の半期授業前後における障害者スポーツに対する認識の変化について検討した結果、障害者や障害者スポーツに対するネガティブなイメージの改善や、工夫次第で障害者と健常者は一

緒にスポーツを楽しむことができるという意識の変化を報告している。藤田⁵⁾は、教育学部体育専攻学生を対象に、「障害者スポーツ」の集中授業の前後で、障害者の能力感や障害者スポーツおよびその指導についての態度に関する質問紙調査を実施している。その結果、学生達は障害者の能力を肯定的に捉え、積極的に評価するようになるとともに、障害者スポーツの面白さや技術面、試合結果に対する理解に関して積極的な評価をするようになったと報告している。また、内田ら²⁶⁾は、横断的研究であるが、スポーツボランティア専攻の学生が大半を占める障害者スポーツ実習受講群と、地域マネジメントや地域福祉専攻の学生で障害者疑似体験の経験群および未経験群において、障害理解研修の効果測定尺度⁸⁾について比較したところ、障害者スポーツ実習受講群は他の群と比較して障害者支援および障害親近性が最も高値を、また、障害困難イメージおよび障害拒絶は最も低値を示していた。以上の先行研究から、専門科目として設置されている「障害者スポーツ演習」や「障害者スポーツ実習」では、障害者や障害者スポーツに対するネガティブなイメージの改善や障害者スポーツへの理解、興味・関心が向上することが認められ、その効果は単純な障害者疑似体験よりも大きいことが示唆された。

一方、障害者スポーツに関する授業への参加ではなく、短日間の障害者スポーツイベントや交流体験の参加によって、障害者や障害者スポーツに対する意識の肯定的な変化が報告されている^{17, 27)}。これらのことから、長期間・長時間の障害者スポーツに関する専門科目受講でなくとも、一般体育における少ない回数の障害者スポーツ体験でも効果が認められる可能性が考えられる。しかし、一般体育実技において数回の障害者スポーツ体験の効果を確認した報告は少ない^{10, 21)}。川田ら¹⁰⁾は、大学一般体育の授業1時間でシッティングバレーボール体験を、また、佐藤²¹⁾は、生涯スポーツの授業中に5時間のアダプテッド・スポーツを実施し、競技映像視聴を加えた少ない回数の障害者スポーツ体験で、障害者や障害者スポーツに対する意識が変化する可能性を報告している。本研究では一般体育実技において、映像視聴は行わず純粋に障害者スポーツ体験のみを実施した結果、少ない体験回数でも障害者に対するネガティブなイメージの改善や、障害者スポーツへの興味・関心を高めるなど、様々な意識変化が認められた。障害者スポーツへの興味・関心および効果認識では効果量が若干低かったが、数回の体験による変化としては意義のある結果であると考えた。一

方、障害者スポーツ実施に対する支援の必要性は変化が認められなかった。このことは、障害者スポーツを肯定的に受け取れるように意識は変化したが、障害者がスポーツに取り組む場合には今まで同様に十分な支援をすべきであると考えていることが示唆された。大学生の障害者スポーツに対する意識に関しては、専攻する学部学科によって異なる可能性が報告されており^{18, 22, 24, 25)}、障害者スポーツ体験の効果についても同様の課題は残されているが、本研究の結果から、大学一般体育において競技映像視聴を伴わない数回の障害者スポーツ体験でも、十分に障害者や障害者スポーツに対する意識を変化させる可能性が認められた。さらに、授業回数の余裕や目的・内容に合わせて、競技映像の視聴や複数種目さらには同一種目複数回の実施を含めて取捨選択していくことが望ましいと考えられた。

障害者スポーツ体験や学習に対する学生の自由記述による感想について検討されている報告もあるが^{9, 15, 16, 28)}、これらは統計解析されている訳ではなく客観的に学生の感想を抽出できているとは言い難い。本研究では、障害者スポーツ体験後の自由記述による感想を全文パソコンに入力した後に、計量テキスト分析ソフト KH Coder を用いてテキスト分析を行った。KH Coder は社会調査研究を中心に積極的に活用されており⁶⁾、最近では大学体育における授業評価に対しても利用され始めている^{14, 23)}。さらに KH Coder の特徴としては、これら頻出語とその共起関係をわかりやすく視覚化させるために、共起の程度が強い語を線で結ぶ共起ネットワークが提示できることにある。本研究の障害者スポーツ体験による感想の計量テキスト分析から、本研究で実施した障害者スポーツのうち、特にシッティングバレーボールおよびサウンドテーブルテニスは、いずれも難しいながらも楽しいと感じていたことが客観的に分かった。さらに、視覚障害者スポーツにおいては、目が見えない状態を実感するとともに、耳を澄まして音を聞き分けることの重要性を感じていた。各種目の感想について共起ネットワークを作成した結果、シッティングバレーボールは、座ったままで移動しボールコントロールするのは難しいが、楽しいスポーツだと感じていた。サウンドテーブルテニスは、耳を集中させてボールを打つのは難しく、音を集中して聞くことで分かる感じており、この種目は見るスポーツとしても楽しいと感じていた。また、これら両種目は共通して健常者と障害者が一緒にできるスポーツであると感じていた。一方、ゴールボール

は、周りの人の声で自分の方向は分かるが、目が見えない状態でボールを投げたり止めたりするのは怖いと感じているようであり、他の種目に比べて楽しさを喚起するまでには到らなかったようであった。ゴールボールに関しては、これらの課題を克服するために少し時間をかけながら、恐怖心を払拭していくような配慮が必要なかもしれない。

本研究では質問紙で得られた量的アプローチの結果に加え、計量テキスト分析で得られた質的アプローチの結果である、障害者の気持ちが共感できたことや一緒に楽しくスポーツできるという感想を抽出できたことで、より具体的にその内情が分析できたと考える。いずれにしても、本研究で実施した計量テキスト分析は、障害者スポーツ実施についての自由記述による感想について具体的かつ客観的な分析・評価の可能性を示すことができたとともに、大学体育での様々な場面で活用できる可能性が示唆された。

本研究で実施した障害者スポーツの種目選択に関しては、障害者スポーツや社会福祉に関連する専門科目ではなく、大学一般体育での障害者スポーツ体験の可能性を模索し、既存の設備・用具での実施、必要用具の安価な導入、明確な障害者体験ができる種目を考慮して設定した。本研究で実施した種目以外にも、ボッチャ、アキュラシー、グランドソフトボール、ブラインドサッカー、フロアバレーボール、陸上競技などが考えられたが、今後はこれらの種目についての効果検討も必要であろう。

5. まとめ

本研究では、女子大学生を対象に大学一般体育実技において障害者スポーツ体験（シッティングバレーボール、サウンドテーブルテニス、ゴールボール）を実施し、障害（者）および障害者スポーツに対する意識の変化について検証するとともに、計量テキスト分析を用いて障害者スポーツ体験の感想について検討することを目的とした。その結果、障害（者）へのネガティブイメージ、障害による日常生活困難感、障害者スポーツ実施に対する心配は有意に低下、障害者スポーツへの興味・関心、障害者スポーツに対する効果認識は有意な増加が認められた。また、計量テキスト分析による障害者スポーツ体験後の感想では、特にシッティングバレーボールおよびサウンドテーブルテニスは、実施そのものは難しいながらも楽しいと感じていた。またアイマスクを使用した視覚障害者スポーツ体験では、目が見えない状態に直面し、耳を澄まし

てボールが奏でる音を良く聞いて競技する実体験ができていたことが確認された。さらに大学体育において計量テキスト分析による質的アプローチを加えることで、対象者の内情がより具体的かつ客観的に評価できる可能性が示唆された。

大学体育における障害者スポーツ導入においては、シッティングバレーボール、サウンドテーブルテニスと比較的实施しやすく、障害者スポーツの魅力を体験しやすい種目であると考えられた。また、ゴールボールについては恐怖心を和らげたり、楽しみを感じられるように少し時間をかけて実施したりする必要性が考えられた。今後は、学科特性の影響を含め、他の障害者スポーツ種目体験の効果も検証していく必要がある。

注) 本研究では平成22年の内閣府・障がい者制度改革推進本部・障がい者制度改革推進会議・障害の表記に関する作業チームが発表した『「障害」の表記に関する検討結果について』における総括において、現在までに「障害」に変わる新たに特定な表記を決定できていないこと、また、その後同府に設置された障害者政策委員会において旧来の「障害」を継続使用していることから、学術論文として本文中の「障害」に関する表記に関しては従来通りの表記を使用した。ただし、学生に配布した質問紙に関しては差別的な印象を排除するため、一般的に使用されるようになってきた「障がい」を使用した。

参考文献

- 1 荒井弘和, 中村友浩: 障害のある学生または傷害を負っている学生を対象とした大学体育授業に関する探索的研究. 障害者スポーツ科学 3, 40-47, 2005.
- 2 長曾我部博: インクルーシブ体育における「まさつ」が子どもの相互理解に及ぼす影響. 障害者スポーツ科学 4, 37-46, 2006.
- 3 独立行政法人日本学生支援機構: 大学・短期大学・高等専門学校における障害学生の修学支援に関する実態調査報告書. 2006.
- 4 独立行政法人日本学生支援機構: 平成25年度大学, 短期大学及び高等専門学校における障害のある学生の修学支援に関する実態調査結果報告書. 2014.
- 5 藤田紀昭: 障害者スポーツの授業が大学生の態度に与える影響に関する研究. 日本福祉大学社会福祉論集 108, 45-54, 2003.
- 6 樋口耕一: KH Coder を用いた研究事例のリスト. KH Coder Index, 2014.
<http://khc.sourceforge.net/>
- 7 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析. ナカニシヤ出版, 2014.
- 8 関大ディスアビリティ・スタディーズ研究会: 障害理解研修の効果測定 — 障害疑似体験と障害平等研修の比較実験 — . 関西大学社会学部紀要 39, 275-287, 2007.
- 9 金山千広: 大学生に教えるべき障害者体育・スポーツの内容についての検討 — 奈良教育大学における「障害者スポーツ論」の実践報告 — . 医療体育 20, 6-12, 2001.
- 10 川田公仁, 山本哲也: 大学体育の授業における障害者スポーツの試み — シッティングバレーボールを用いて — . 研究紀要 (つくば国際大学) 5, 111-122, 1999.
- 11 公益社団法人全国大学体育連合: 第4回全国大学体育連合指導者養成研修会実技指導研修報告. 大学体育 101, 73-91 2013.
- 12 公益社団法人全国大学体育連合: 第5回全国大学体育連合指導者養成研修会実技指導研修報告. 大学体育 103, 81-91, 2014.
- 13 草野勝彦: 改めて体育の可能性を問う — 体育でノーマライゼーションの具体化を — . 体育科教育 51, 10-13, 2003.
- 14 益川満治, 園部豊: 大学体育授業におけるバスケットボールの指導 — レイアップシュートの技能習得場面について — . 第2回大学体育研究フォーラム抄録集, 21, 2014.
- 15 文部科学省初等中等教育分科会: 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進. 2012.
- 16 永浜明子, 藤村弘子: アダプテッド・スポーツ体験による大学生の意識変化に関する事例報告 (第I報) — アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から — . 大阪教育大学紀要: 第5部門・教科教育 60, 39-49, 2011.
- 17 西垣景太, 上田ゆみ子, 藤丸郁代, 伊藤守弘: 障がい者スポーツイベントの学生への教育的効果 — 障がい者に対するイメージの変化及びコミュニケーション能力への影響 — . 中部大学教育研究 12, 55-58, 2012.
- 18 大山敬子, 金壽子: 障害者スポーツに対する大学生の意識調査. 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要 5, 17-25, 2000.

- 19 岡川暁：インクルーシブ体育と大学体育 — 学生の意識調査から — . 日本体育学会大会予稿集 59, 275, 2008.
- 20 岡川暁：インクルーシブ体育と大学体育 — 学生の意識調査から — 第2報. 日本体育学会大会予稿集 60, 296, 2009.
- 21 佐藤紀子：「アダプテッド・スポーツ」の授業が歯学部生のスポーツや障害者に対する意識に及ぼす影響. 日本大学歯学部紀要 40, 49-56, 2012.
- 22 澤江幸則, 齊藤まゆみ, 柄田毅, 井田智之, 村上祐介, 牧佑耕, 荒川歩美, 中原陽子：体育専攻学生のアダプテッド・スポーツ活動への関心を高めるための教育内容について — 非体育専攻学生との比較を通して — . 障害者スポーツ科学 9, 35-45, 2011.
- 23 園部豊：大学体育における合気道授業の改善には何が必要か？ — 受講生の自由記述による探索的検討 — . 第2回大学体育研究フォーラム抄録集, 21, 2014.
- 24 角南良幸, 鍵村昌範, 下園博信：障害者スポーツに対する女子学生の意識に及ぼす影響 — 専攻学科および運動経験の関係について — . 福岡女学院大学紀要 人間関係学部 15, 49-55, 2014.
- 25 丹所忍, 徳田克己：障害者スポーツに関する大学生の認識 — 視覚障害者のスポーツを中心として — . 障害理解研究 1, 61-66, 1996.
- 26 内田若希, 大谷まや：障害者スポーツ実習と障害疑似体験における障害理解の差異の検討. 障害者スポーツ科学 11, 33-41, 2013.
- 27 安井友康：車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響. 障害者スポーツ科学 2, 25-30, 2004.
- 28 吉岡尚美, 内田匡輔：障害のある人と「障害者スポーツ」に対する体育学部生の認識の変化に関する調査 — 「障害者スポーツ演習」の試みと効果 — . 東海大学紀要体育学部 37, 21-27, 2007.

（平成26年7月23日受付）
（平成26年12月14日受理）